

## 「イエス！次郎（校長室より）」（第7号） 「母の思い出」

令和8年9月3日の夜、母は92歳の生涯を閉じました。

母は長い人生の中で、商売をしながら家族を支えてきました。運転免許を持たなかった母は、大型三輪自転車の荷台に商品をのせて、毎日毎日、町中を走り回っていました。「深堀町で大型三輪自転車を流行らせたのは私よ。」と、母は自慢げに話していました。

昭和57年の長崎大水害の後、断水で困って、水を溜めるための大きなポリバケツを買いに来られたお客様方に、「大変だけど、頑張りましょうね。」と、母は声をかけながら、家の井戸水を満タンに入れて差し上げていました。その事がクチコミで噂になり、大行列が出来るほど、多くのお客様方が、母のお店「渡崎商店」にポリバケツを買いにいらっしゃいました。私が成人してから、「次郎、あんたはポリバケツと井戸水のお陰で大学に行けたのよ。」と、冗談交じりで話していた母の笑顔が忘れられません。本当に商売上手で、家族のために一生懸命生きた、優しい母でした。

告別式が終わり、母との最後のお別れの時、私は「長男だけど次郎カード」を、棺の中に入れました。私には、産まれてくることができなかった兄がいるそうです。母は、その兄のことを大切に思い、長男である私に「次郎」と名付けたそうです。「お母さん、産んでくれてありがとう。ゆっくり休んでね。」と最後に語りかけて、私は手を合わせました。

これまで母を支えてくださった皆様方、母と親しくお付き合いいただいた皆様方、そして、残された遺族に、温かいお心遣いとお言葉をくださった皆様方に、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

